

# 教育研究業績書

2018年05月14日

所属：共通教育部

資格：准教授

氏名：西尾 亜希子

研究分野	研究内容のキーワード
教育社会学	高等教育とジェンダー
学位	最終学歴
PhD	Doctoral Studies in Education, Institute of Education (現UCL Institute of Education), University of London

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要

<b>1 教育方法の実践例</b>		
1. ミニツッペーパー活用による双方向授業の展開	2010年04月から現在	共通教育科目授業の定員は100名であり、双方向的な授業の展開が困難であるが、各授業で数回ミニツッペーパーを授業中の課題として課し、次の授業でそのいくつかを紹介し、フィードバックを行ったり、その後の授業の展開に役立てている。
2. 共通教育科目「ネットで学ぶ英語」、「現代女性の理想と現実」（短大ゼミ）等の科目でレポート・論文の書き方指導	2008年04月～2017年03月	これらの科目（共通教育）では評価方法がともにレポートであるため、導入部・展開部・結論部などの段落の設け方や参考文献の挙げ方を指導している。
3. 担当する全科目において授業中に科目内容に関するクイズを出題	2008年04月～現在	受講生との双方向の授業を目指して、受講生にたびたび質問を投げかけ、受講生には自由に発言するよう促したり、タイミングを見計らって授業内容に関する短いクイズ（回答は3択～5択）を出題し、授業に集中するよう促している。

<b>2 作成した教科書、教材</b>		
1. 女が変わる男が変わる100冊の本	1997年10月	富士谷あつ子・伊藤公雄編著、かもがわ出版。女性学・男性学・ジェンダー学に関わる執筆者のひとりとして、大学時代に感銘を受けた著書『シンデレラ・コンプレックス』74-75頁、『津田梅子』82-83頁、『美の陰謀』76-77頁や、女子教育を研究する上で興味深い『女子大学論』78-79頁、『才女考』80-81頁、メディアの影響力を考える上で役立つ『雑誌文化の中の女性学』84-85頁の計6冊の概要を記し、紹介した。他の共著者は 浅田豊、安藤明人、角村正博、野口芳子、森池日佐子、上杉孝實、村岡洋子。

<b>3 実務の経験を有する者についての特記事項</b>		
1. 西宮市時事講座担当	2017年9月5日	西宮市民を対象とした講座「えっ、世界で111位？男女共同参画社会をめざして」の講師を担当した。世界経済フォーラムが2016年に公表した「「グローバルジェンダーギャップ指数2016」によると日本の男女平等ランキングは144か国中111位であり、経済、教育、政治、保健の4分野のうち、経済、教育の評価が特に低かった。評価の内容、問題点、解決策を明示した。西宮市学文公民館主催。
2. 「働き方改革」の実現に向けて一非正規雇用者を主体とした図書館運営の課題	2017年8月2日～2017年8月3日	図書館関係者、自治体関係者らを対象とした武庫川女子大学・株式会社図書館流通センター共催セミナーで、「日本型雇用システムの視点から見る女性の活躍と雇用」と題して、特に女性非正規雇用の現況（労働環境や不安など）に焦点をあてつつ、女性非正規雇用者および図書館や自治体の双方にとってメリットのある働き方改革の方法について述べた。8月3日13:00-14:30 武庫川女子大学日下記念マルチメディア館
3. 兵庫女子教育セッション2015	2015年05月30日	中学・高校受験を考えている生徒や保護者を対象に「今だから必要な女子教育とは一親世代と異なる時代を生きるために」と題して1時間の講演を行った。芦屋ラポルテホール。
4. 2011年度文化祭協賛・教養講座担当	2011年11月	学生、教職員、市民を対象に「『女性はお金に疎い』ことがなぜ問題なのかー アメリカからの警鐘」と題して講義を行なった。
5. 寝屋川市男女共同参画推進センターふらっとねやがわ学習講座担当	2011年03月	「名前は最初のプレゼント」と題して、性別や流行にとらわれるのではなく、ひとりの人間としての子どもへの思いを込め、命名することの大切さについてジェンダーの観点から講義を行った。
6. 西宮市大学交流センター共通単位講座担当	2010年04月～2010年09月	西宮市内の大学に通う学生や社会人に対して、日本社会における基本的なジェンダー問題について講義した。
7. 西宮市男女共同参画センターウェブ主催講座担当	2008年12月	「多様化する家族ーイギリスに学ぶ家族支援のあり方」と題した講座を担当した。ブレア政権における社会保障制度の拡充やその効果、さらには問題点について、特に社会的排除に焦点をあてて検討し、日本への示唆について明らかにした。
8. 金沢大学男女共同参画キャリアデザインラボラトリー主催プログラムの講師担当	2008年10月	共通教育科目「ジェンダーと教育ージェンダー学実践編」を担当した。同大学の学生に対するオムニバス形式の授業の講師の一人として、教育におけるジェンダー問題

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
<b>3 実務の経験を有する者についての特記事項</b>		
9. 川西市役所の男女共同参画職員研修会講師担当	2006年11月	について講義した。 「日本およびフランスにおける『ジェンダー』政策の現状：家族政策を中心に」というテーマで、同市役所の課長級以上の職員に対してジェンダーに関する基礎知識および日仏のジェンダー政策について特に家族政策の観点から講義を行った。
10. 甲南大学文学部の「ジェンダー論」で講師担当（ゲスト講義）	2002年01月17日および2004年01月15日	隔年で高等教育とキャリアに関する講義を行った。大卒者のキャリアパスについてジェンダー的観点から考察した。
<b>4 その他</b>		
1. 留学および大学院等への進学に関する相談受付	2009年04月～現在	学生からの相談内容は、語学留学、アカデミック留学、短大から大学への編入、就職、英語の勉強の仕方など実に多様であるが、どれも学生にとっては将来がかかわる大事な相談ごとばかりである。可能な限り時間を割き、相談にのるよう心がけている。

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
<b>1 資格、免許</b>		
1. TOEFL 607点	1993年05月	ロンドン大学修士課程に進学する前のスコア。
2. Cambridge First Certificate	1991年02月	ケンブリッジ大学英語検定機構による資格。
<b>2 特許等</b>		

<b>3 実務の経験を有する者についての特記事項</b>		
1. 伊丹市男女共同参画施策市民オンブード（学識経験者）	2018年05月～2020年03月31日	伊丹市男女共同参画施策市民オンブード設置要綱に基づく業務（「第2期伊丹市男女共同参画計画」の進捗状況の調査、調査報告書の作成、調査内容の報告等。
2. 川西市男女共同参画審議会 副会長（有識者）	2017年05月31日～現在	市民意識調査の作成や結果の分析および条例案の作成などを通じて市への提言を行っている。
3. 伊丹市男女共同参画審議会委員（有識者）	2015年07月～2017年06月	委員としてDV対策基本計画策定等にあたった。
4. 英国におけるパーソナルファイナンス教育導入の主導者および担当主任への面接調査	2014年4月26日から2014年5月03日	英国では2014年秋から中等教育におけるパーソナルファイナンス教育が必修化された。必修化に至るまでには様々な議論が展開され、困難を極めた。日本ではすでに金融・経済教育が必修化されているが、時間の確保や教員の知識不足など、様々な問題が指摘されている。科研費関連研究の一部として、英国におけるパーソナルファイナンス教育の導入の主導者と実際の現場で担当主任になることが決定している教員らに現状と課題について半構造化面接調査を実施し、日本の今後の教育のあり方に関する示唆を得た。
5. Special Japanese Editorial Assistant of GALE Journal	2012年11月	GALE Journal の日本語編集（日本語訳）アシスタントとして、掲載論文の要旨の日本語訳の編集を行った。
6. 日本ジェンダー学会誌『日本ジェンダー研究』編集委員長	2012年09月～2013年08月	投稿された論文の査読者を決めたり、掲載が決まった論文の編集を行った。
7. 日本ジェンダー学会誌『日本ジェンダー研究』編集委員	2011年09月～現在	投稿された論文の査読を行っている。
8. 日本ジェンダー学会理事	2011年09月～現在	学会運営のあり方を議論したり、実際の運営に関わっている。具体的には学会誌の編集や学会の開催などについてである。
9. 西宮市男女共同参画推進委員会 委員（有識者）	2009年04月～現在	委員として西宮市男女共同参画プランの作成や市民・事業所意識調査の作成・実施、DV対策基本計画策定などに関する助言を行っている。
10. 川西市男女共同参画審議会 委員（有識者）	2005年04月～2017年04月	審議会委員として川西市男女共同参画プランの作成、市民意識調査の作成・実施、DV対策基本計画策定、男女共同参画推進条例などに関する助言、ニュースレター用の記事を執筆してきた。
11. 宝塚市男女共同参画審議会 委員（一般公募）	2002年04月～2005年03月	審議会委員として宝塚市男女共同参画プランの作成や市民意識調査の作成・実施などに関する助言を行った。
12. 大阪府女性総合センター（ドーンセンター）『Dawn』編集委員	2001年04月～2003年03月	海外向け機関誌『Dawn』の記事執筆および編集を行った。
<b>4 その他</b>		
1. 西尾亜希子（2010）「女子の大学進学に伴う諸効果に関する考察：広義の人的資本論によるアプローチ」『武庫川女子大学教育研究所 研究レポート』の引用	2016年	姉川恭子（早稲田大学大学総合研究センター）「社会的評価における早稲田大学の位置付けと戦略的ベンチマーキングに関する研究：女子学生の進学動向をめぐって」の6頁で引用。
2. 引用実績 学術論文「日本人留学生の留学動機に関するジェンダー学的考察」（査読あり）の引用	2014年4月	赤崎美砂（2014）「発展する留学成果意識－日本人成人女性の生活設計と留学」淑徳大学編『国際経営・文化研究』vol. 18, No. 2, 1-14頁で引用。
3. 引用実績 学術論文「英国大学院で学ぶ日本人留学生の動向－ジェンダーの視点から」	2013年	鈴木寿子（2013）「女性の大学院留学生はどのように日本留学を開始、継続、終結するのか」お茶の水女子大学教育機構紀要『高等教育と学生支援』8-19頁で引用。

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
<b>4 その他</b>		
4. 引用実績 博士論文'Issues Facing Japanese Postgraduate Students Studying at the University of London with Special Reference to Gender'の引用	2012年	Wisker, G. (2012)The Good Supervisor: Supervising Postgraduate and Undergraduate Research for Doctoral Theses and Dissertations (Palgrave Research Skills), Palgrave Macmillan, 324頁で引用。
5. 引用実績 学術論文「日本人留学生の留学動機に関するジェンダー学的考察」(査読あり)の引用	2008年12月	小林葉子 (2008) 「エンパワメントとしての英語力とジェンダー: 多学問的視座からTESOLへの示唆」岩手大学人文社会科学部『アルテス リベラレス』1-11頁で引用。
6. 引用実績 学術論文「日本人留学生の留学動機に関するジェンダー学的考察」(査読あり)の引用	2008年	神谷浩夫、由井義通他 (2008) 「オーストラリアで学ぶ日本人留学生のライフコース」愛知教育大学『地理学報告』106, 1-14頁で引用。
7. 引用実績 博士論文'Issues Facing Japanese Postgraduate Students Studying at the University of London with Special Reference to Gender'の引用	2007年	Leonard, D. (2006) 'Early career academics' doctoral experiences' SRHE Symposium 11th December 2007, 3頁で引用。
8. 引用実績 博士論文'Issues Facing Japanese Postgraduate Students Studying at the University of London with Special Reference to Gender'の引用	2001年	Leonard, D. (2001) A Woman's Guide to Doctoral Studies, Open University Press, 26頁で引用。
9. ブリティッシュ・カウンシル奨学金受給	1996年9月～1997年8月	ロンドン大学教育研究所 (Institute of Education (現UCL Institute of Education), University of London) 教育学専攻 博士課程在籍時に受給。
10. ロータリー財団国際親善奨学金受給	1994年9月～1995年8月	ロンドン大学教育研究所 (Institute of Education (現UCL Institute of Education), University of London) 女性と教育専攻修士課程時に受給。

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
<b>1 著書</b>				
1. Widening Participation in the Context of Economic and Social Change (査読あり投稿論文による書籍)	単	2017年07月	Forum for Access and Continuing Education (FACE), London, England: University of East London.	"Undergraduate student perceptions of personal finance in Japan: A comparison across genders and major fields of study"を執筆した。2016年6月に第23回FACE大会(クィーンズ大学、英国ベルファスト)で口頭発表した研究を論文にまとめたもの。科学研究費補助金(2012-2014)関連の研究の成果の一部として、関西の3大学で学ぶ56名の大学生がパーソナルファイナンスの捉え方の共通点と相違点についてジェンダーと専攻分野の観点から考察を試みた。
2. アクティブ・ラーニングで学ぶジェンダー	共	2016年03月	ミネルヴァ書房	第8章「キャリアと金融リテラシー-人生設計の視点を学ぶ」担当。編著者は青野篤子。他の執筆者は宇井美代子、上野淳子、赤澤順子、神前裕子、水澤慶緒里、井ノ崎敦子、松並知子、荻野佳代子、滑田明暢、土肥伊都子、澤田忠幸。
3. アジアのなかのジェンダー第2版	共	2015年05月	ミネルヴァ書房	第1章「ジェンダーを考える視座」1-17頁、第6章「貧困化する女性-貧困予防策を探る」127-149頁担当。編著者は川島典子、三宅えり子。他の執筆者は岡本民夫、西尾亜希子、岩田正美、松並知子、富田安信、大塩まゆみ、今井小の実、中村艶子、佐伯順子、細見三英子、佐々木正徳、喜多村百合、香川孝三。『アジアのなかのジェンダー』を2012年に刊行して以降、日本を含むアジア諸国の社会情勢が大きく変化したことに伴い、データや考察をアップデートしたものである。
4. アジアのなかのジェンダー	共	2012年05月	ミネルヴァ書房	第1章「ジェンダーを考える視座」1-16頁、第6章「貧困化する女性-貧困予防策を探る」107-129頁の執筆、および他9章の編集作業を行った。編著者は川島典子、西尾亜希子。他の執筆者は岡本民夫、岩田正美、松並知子、富田安信、大塩まゆみ、今井小の実、中村艶子、佐伯順子、三宅えり子、細見三英子、佐々木正徳、喜多村百合、香川孝三。
5. 異文化間教育の研究	共	2008年12月	ナカニシヤ出版	第15章「異文化間教育における『ジェンダー』についての一考察」299-315頁担当。異文化間教育研究においてこれまでなされてきた「ジェンダー」に関する研究を整理し、ジェンダー研究が展開してきた本質主義をめぐる議論がそれに与える示唆を明らかにすることを試みている。小島勝編著、佐藤郡衛、塚本美恵子、村田雅之、山本雅代、徳井厚子、足立祐子、井狩幸男、末藤美津子、加藤三保子、廿日出里美、小澤理恵子、鈴木一代、とも利枝子、馬淵仁、松尾知明、渋谷真樹、西尾亜希子、出羽孝行、白土悟。
6. Information Technology and Economic Development (査読あり投稿論文による書籍)	共	2008年10月	Hershey, PA: Information Science Reference	ISBN:9781599045795 "Chapter XX The significance of the existence of women's colleges and their entry into science-related fields" PP. 278-290を執筆。Y. Kurihara, S. Takaya, H. Harui, H. Kamae, M. Karatas,

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
<b>1 著書</b>				
				S. Bekmez, R. Nakagawa, M. Aslam, T. F. Siems, M. Gapen, A. Nishio, M. Papaioannou.
<b>2 学位論文</b>				
1. Issues Facing Japanese Postgraduate Students Studying at the University of London with Special Reference to Gender	単	2001年08月	University of London	博士論文。総頁数337頁。ロンドン大学大学院で学ぶ日本人留学生に対して質的調査、主にインタビューを実施し、彼らが私生活面や学業面で直面する問題を中心にジェンダーの視点から考察した。
<b>3 学術論文</b>				
1. 女子大学生のキャリアプラン選択の規定要因—稼得意識、進路選択に対する自己効力、自尊感情、職業観	共	2018年03月	神戸女学院大学『女性学評論』第32号	「貧困の女性化」が大きな問題となっていることを受け、女子大学生のキャリアプラン選択の傾向やその要因について検討した。その結果、経済的な自立志向ややりがいを求める職業観が稼得意識に関連する一方、プライベートを優先しすぎたり、職場での人間関係などを重視しすぎることが、稼得意識の喪失につながる可能性があることが示唆された。稼得意識を高めるような新たなキャリア教育を開発する必要性が示された。25-52頁。松並知子・西尾亜希子
2. 女性にとっての職業資格の経済的効用および非経済的効用—女子大学で取得可能な国家資格を中心に	単	2018年刊行予定	武庫川女子大学教育研究所『研究レポート』48号	「資格を取っておくと就職、転職、復職に有利」とよくいわれるが、本当か。実際には資格の効用については良く知られていないのではないか。女子大学で取得可能な国家資格を中心に、それらの資格の効用について経済的側面と非経済的側面から検討した。
3. Student perception of personal finance: a comparison across genders and major fields of study (査読あり)	単	2016年06月30日	Forum for Access and Continuing Education (FACE) The 23rd FACE Annual Conference Abstract Booklet, Queen's University, Belfast, Northern Ireland, UK,	科学研究費補助金(2012-2014)関連の研究の成果の一部として、関西の3大学で学ぶ56名の大学生がパーソナルファイナンスの捉え方の共通点と相違点についてジェンダーと専攻分野の観点から考察を試みた。
4. 女子大学生のキャリアプランと進路選択に対する自己効力、経済的自立志向、基本的信頼感との関連	共	2013年09月	日本心理学会第77回大会発表論文集	女子大学生のキャリアプランにどのような要因が関連しているのかを明らかにするため、関西の女子大学生・短大生500名を対象に質問紙調査を実施した。その結果、結婚も出産もせずに働き続けたい人は自尊感情や基本的信頼感が低い傾向が見られ、また自己効力では他のグループと明確な差が認められなかったことから、自己効力や基本的信頼感を高めるような教育が必ずしも就労継続の意志につながらないことが示唆された。1229頁、松並知子、西尾亜希子。
5. Career Planning from a Financial Perspective: An Investigation into Female Students' Attitudes to Work, Family and Money (査読あり)	共	2012年09月	The Journal and Proceedings of GALE (5)	関西の女子大学・短期大学で学ぶ学生428名を対象に将来のキャリアプランおよび金銭感覚についてアンケート調査を実施し、結果を考察して、若い女性の将来設計の危うさについて明らかにし、ジェンダー教育および金融教育のあり方について検討を試みた。38-58頁。、西尾亜希子、松並知子。
6. 女性のキャリアと金融リテラシー—スミスカレッジの金融教育からの示唆	単	2012年03月	武庫川女子大学教育研究所 研究レポート、第42号	金融リテラシーとは何か、なぜ女性こそその能力が必要とされているのか、具体的にどのような教育が可能なのかについて、先行研究、アメリカ人女性の現状、アメリカのスミス・カレッジにおける教育実践を参考にしつつ、日本の大学における教育実践への示唆を得た。87-105頁。
7. 社会的排除と高等教育政策に関する国際比較研究—高等教育の経済効果の視点から	共	2010年09月	(財)全労災協会『公募研究シリーズ』公募委託調査研究成果報告	貧困問題から社会的排除問題へ視点がシフトしている理由の整理を行なった。また、英国のブレア政権下では、社会的排除問題を高等教育政策の中で取り扱い、大学進学を希望する者を育て、その希望を叶えてきたが、その背景にはどのような理論が存在するのか、どのような効果があったか、課題は何かを中心に議論している。第2章「社会的排除対策の理論的基盤」18-26頁、第4章4節「日本版フレキシビリティ社会は可能なのか」49-52頁執筆担当。高屋定美、西尾亜希子。
8. 女子の大学進学に伴う諸効果に関する考察—広義の人的資本論によるアプローチ	単	2010年03月	武庫川女子大学教育研究所 研究レポート、40号	大学進学率には依然として男女差が見られ、常に女子の進学率は男子に比べて低い。しかし、女子の大学進学率の上昇には貨幣的効果および非貨幣的効果等期待することができる。これらの点について広義の人的資本論を用いて検討した。59-81頁。
9. 女性学・ジェンダーフォーラム in 2007 — 未来へつなぐ女性学、十人十色、『私』の30年を振り返る	共	2009年12月	日本女性学研究会編『女性学年報』、第30号	社会的排除問題をジェンダーの視点から考察することによって、日本における社会的に排除されている人々の特定し、それらの人々に対する支援策のあり方について検討した。131-177頁。荒木菜穂、西尾亜希子、堀内真由美、森理恵他
10. 異文化間教育研究とジェンダー研究の接続の可能性—『エイジェン	単	2007年03月	研究代表者 小島勝 龍谷大学文学部教授『	アメリカのポスト構造主義の代表的思想家の一人であるJ・パトラーの「エイジェンシー」概念を活用し

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
<b>3 学術論文</b>				
シー』概念の活用を中心に			異文化間教育に関する横断的研究—共通のパラダイムを求めて』平成16年度~平成18年度科学研究費補助金 基盤研究B (1) 研究成果報告書	て、「文化」を捉える事ができないか、事例を挙げながら可能性を探った。295-305頁。
11. 英国大学院で学ぶ大学院留学生の動向—首相主導事業 (The Prime Minister's Initiative) 開始以前と開始以降の比較	単	2007年02月	有本章・横山恵子編『外国人留学生確保戦略と国境を越える高等教育機関の動向に関する研究—英国・香港の事例』広島大学高等教育研究叢書、89号	ブレア元首相の政権下では教育政策が重視され、高等教育においても留学生を獲得することによって、国内の高等教育や経済を活性化することが目指された。本稿では首相主導事業開始以前と以降に見られる留学生の動向をジェンダーの観点から分析した。19-34頁。
12. グローバル化する高等教育におけるジェンダー問題—英国の首相構想(PMI)の影響に関する一考察	単	2007年01月	広島大学高等教育研究開発センター (拠点リーダー：有本章) 編『21世紀型高等教育システム構築と質的保証』COE最終報告書第一部 (下)	ブレア元首相の政権下では教育政策が重視され、高等教育においても留学生を獲得することによって、国内の高等教育や経済を活性化することが目指された。本稿では留学生に見られるジェンダー格差に焦点をあて、考察を試みた。121-138頁。
13. Gender Issues in the Globalization of Higher Education: A Study of the Impact of the Prime Minister's Initiative in the UK	単	2006年09月	Research Institute for Higher Education, Hiroshima University (ed.) Gender Inequity in Academic Profession and Higher Education Access: Japan, the United Kingdom, and the United States, COE Publication Series 22	ブレア元首相の政権下では教育政策が重視され、高等教育においても留学生を獲得することによって、国内の高等教育や経済を活性化することが目指された。本稿では留学生に見られるジェンダー格差に焦点をあて、考察を試みた。117-132頁。
14. 英国大学院で学ぶ留学生の動向 (PMI以前とPMI以降の比較)	単	2006年03月	広島大学高等教育研究開発センター (有本章) 編『各国における外国人留学生の確保や外国の教育研究機関との連携体制の構築のための取り組みに関する調査』平成17年度 文部科学省先導的大学改革推進委託研究	ブレア元首相の政権下では教育政策が重視され、高等教育においても留学生を獲得することによって、国内の高等教育や経済を活性化することが目指された。本稿では首相主導事業開始以前と以降に見られる留学生の動向をジェンダーの観点から分析した。
15. 女性学教育における教授姿勢の問題：大学の女性学関連講座の受講生による批判から (査読あり)	単	2004年05月	『大学教育学会誌』 (第26巻 第1号)	本研究では、新聞等で取り上げられた女性学関連科目の担当教員らに対する受講生からの批判内容を整理した後、担当教員らが学生の関心を引くため有効と考え、積極的に採用して来たビデオ鑑賞やロールプレイ等に潜む問題点を示唆した。そして、さらなる教授法の発展には、今まで有効とされてきた教授法の問題点の所在を明らかにすることが不可欠であることを主張した。82-88頁。
16. 大学が担うべき役割の再検討：女子学生に対する就職サポートを中心に (査読あり)	単	2003年11月	『大学教育学会誌』 (第25巻2号)	女子学生の就職サポートにはロールモデルやメンターの活用が有効であることを、日米英などの研究や教育実践をもとに明らかにした。31-37頁。
17. 大学における女性学教育：教授法に関する現況と課題	共	2003年11月	『大学教育学会誌』 (第25巻2号)	大学における女性学教育で用いられる傾向のある教授法について様々な実践報告書をもとに考察し、問題点を明らかにした。65-67頁、西尾亜希子、志水紀代子。
18. 英国大学院で学ぶ日本人留学生の動向：ジェンダーの視点から	単	2003年03月	大阪女学院短期大学紀要』 (第32号)	博士論文の第2章を編修したもの。本研究では、日本人留学生の留学の特徴を男女別に明らかにするため、英国で独自に入手した統計を用いて、英国大学院で学ぶ日本人留学生の動向を英国大学院で学ぶ全留学生の動向と比較すると同時に、ジェンダーの視点から分析・考察を行なった。113-125頁。
19. 日本人留学生の留学動機に関するジェンダー学的考察 (査読あり)	単	1999年09月	『日本ジェンダー研究』 (第2号)	博士論文の第7章を編修したもの。留学の動機・目的を分析する際、ジェンダーの視点からの考察はほとんどなされて来なかった。ロンドン大学大学院の日本人留学生 (男女52名) へのインタビューを基に、留学の動機・目的を性別により分析し、女性特有の問題点を明確化することを試みた。57-71頁。
20. イギリス青年男女のジェンダーによる役割分担に関する考察：ロンドンの青年男女を対象とした事例研究	単	1997年09月	『武庫川女性学研究』 (第2号)	家事における性別役割分業の現実を追究するために、アンケートに加えてインタビューを実施し、それらに見られる回答間の差異について検討した。その結果、同じ内容の質問に対し、アンケートでは理想に近い回答が、インタビューでは本音またはより現実に即した回答が得られることがわかり、彼らの抱く分業観の理想と現実には、依然として大きなギャ

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
<b>3 学術論文</b>				
				ップがあることが判明した。69-83頁。
<b>その他</b>				
<b>1. 学会ゲストスピーカー</b>				
1. Global Approaches to Widening Access from across the UK	共	2016年06月30日	Forum for Access and Continuing Education (FACE) 23rd Annual Conference	FACE会長のイースト・ロンドン大学J. ストラン教授によりラウンドテーブルセッションのパネラーとしての招聘。今大会のテーマである“Widening participation within the context of economic and social change: engaging applicants and empowering students to create successful graduates (経済・社会が変化する中で広がる参加：成功する卒業生を輩出するために進学希望者に関わり、学生をエンパワーする)”に関して、アメリカ、イギリス(イングランドと北アイルランド)、オーストラリア、スウェーデンからの報告者らと議論した。西尾は、日本の高等教育事情を概観した後、高学歴女性と労働市場の関係について報告した。(Queen's University Belfast, Northern Ireland, UK)
2. ジェンダーで学ぶ・アクティブ・ラーニング	単	2015年09月	日本心理学会第79回大会	招聘シンポジストとして「大学生の金融リテラシーを高めるための教育実践—ジェンダーの視点から」というタイトルで研究報告した。『ジェンダーで学ぶアクティブ・ラーニング』(2016年1月にミネルヴァ書房から刊行予定)の西尾著「第8章キャリアと金融リテラシー」の一部と関西3大学の学部生を対象に実施した金融リテラシーに関する調査結果をもとに「親近感」と「リアリティ」のある題材を扱う教育を「継続的」に実施していくことの重要性について述べた。(名古屋国際会議場)
3. 生活の質を考える—ジェンダーの視点から	単	2013年04月	Pas A Pas	ここ十数年アメリカやカナダ等の先進諸国において生活の質や幸福に関する研究が盛んになっている。今日では日本においてもその傾向が見られるようになってきた。一方でこれらの研究にはジェンダーの視点が欠けていることは否めない。本講演では人々がどのような事柄に対して、どのような時に、どのような場面で幸福を感じるのかに関する先行研究の整理を行った後、ジェンダーによる違いが明らかなる事柄について考察を行なった。
<b>2. 学会発表</b>				
1. Student perception of personal finance: a comparison across genders and major fields of study	単	2016年06月30日	Forum for Access and Continuing Education (FACE) 23rd Annual Conference, Queen's University Belfast, UK	科学研究費補助金(2012-2014)関連の研究の成果の一部として、関西の3大学で学ぶ56名の大学生がパーソナルファイナンスの捉え方の共通点と相違点についてジェンダーと専攻分野の観点から考察を試みた。
2. 商学部・経済学部女子に学ぶパーソナル・ファイナンス教育のあり方	単	2014年09月	日本教育社会学会第66回大会、愛媛大学・松山大学	女子の大学進学者の増加に伴い、奨学金を借りる女子学生は増加しているにもかかわらず、労働市場における男女間格差があるため、奨学金の返還の見通しは女性であるがゆえに立てにくい。そうである以上、従来、お金のことは男性に任せがちであった女性こそ、ファイナンシャル・リテラシーが必要になってきている。本研究では、関西の3大学に在籍する大学生のパーソナル・ファイナンスやキャリアデザインに関して実施した面接調査の結果をもとに、特に女性にとって必要と思われるパーソナル・ファイナンス教育のあり方について検討した。
3. 大学生の奨学金受給行動とその要因に関する研究—関西3大学での面接調査から	単	2014年06月	日本高等教育学会第17回大会、大阪大学豊中キャンパス	今日、大学生の2人に1人が貸与型奨学金を受給している。奨学金が「借入金」であることや、「借りること」の負担やリスクについて十分な知識や覚悟もないまま、借りているのではないかと。いくらからいを、なぜ借りているのか、返還についてどのような計画を持っているのかについて質的調査より明らかにした。返還計画を十分持たないまま、結婚・出産となれば、奨学金の返済に追われている親が子どもを奨学金を借りよう追い込むことになる。世代を通じて返済に追われるという自分たちの親世代以前パーソナルファイナンス教育の導入の重要性について検討した。
4. 女子大学生のキャリアプランと進路選択に対する自己効力、経済的自立志向、基本的信頼感との関連	単	2013年09月	日本心理学会 第77回大会 札幌市産業振興センター	研究の結果、自己効力や基本的信頼感を高めるような教育が必ずしも女性の就労継続の意志にはつながらないことが示唆されたため、経済的自立心を養えるようなキャリア教育を実践していくことが重要であると提言した。ポスター発表、松並知子、西尾亜希子
5. 女性の貧困予防策としての金融教育—諸外国の取り組みから	単	2012年09月	日本ジェンダー学会、とよなか男女共同参画推進センターすてっぷ	イギリスのシティズンシップ教育と金融教育の関連を中心に欧米諸国と日本の金融教育の現状について比較研究を行い、日本の金融教育への示唆を探った

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
<b>2. 学会発表</b>				
6. Learning about gender: A survey of interests at a women's university	共	2011年05月	Gender Awareness in Language Education (GALE) Conference、京都大学	162 female university and junior college students were given a written survey. The survey featured qualitative and quantitative questions that focused on topics of interest, identifying important issues for Japanese women, preferred classroom activities, and the overall impact on students of studying gender. Akiko Nishio, Jhana Bach, Tomoko Matsunami.
7. 成人女性に対する高等教育供給プログラムの検討—英国の「高等教育へのアクセス」からの示唆	単	2010年06月	2010年度日本女性学会大会、大阪府立男女共同参画・青少年センター（ドーンセンター）	わが国における成人女性に対する高等教育供給プログラムの合理性を広義の人的資本論を用いて明らかにした上で、そのあり方について英国の「高等教育へのアクセス」コースから示唆を得た。
8. 社会的排除と高等教育政策に関する国際比較研究—高等教育の経済的効果の視点から	共	2010年03月	(財)全労災協会(全労災協会会議室)	(財)全労災協会による2009年度の公募委託調査研究として行った研究の結果報告を行った。高屋定美、西尾亜希子。
9. 潜在的需要に応じた高等教育供給プログラムの合理性とその検討	共	2009年06月	日本高等教育学会第12回大会、長崎大学	(財)全労災協会による2009年度の公募委託調査研究として行った研究の中間報告として、A. センのケイパビリティ・アプローチを使って高等教育供給プログラム構築の意義を考察した。西尾亜希子、高屋定美。
10. 社会的排除・ジェンダー・教育—英国における取り組みと日本への示唆	単	2007年12月	日本女性学研究会30周年記念 女性学・ジェンダーフォーラム in 2007、大阪府立女性総合センター	社会的排除とジェンダーの問題を教育的な観点から考察し、社会的排除問題に積極的に取り組む英国政府の取り組みから日本への示唆を得た。
11. 異文化間教育における『文化』の捉え方	単	2007年06月	異文化間教育学会第28回大会(ケース/パネル・パネラー) 目白大学新宿キャンパス	異文化間教育学における「文化」の捉え方について、グローバリゼーションが進展する中、これまでありがちだった本質主義的な捉え方の問題を指摘した。
12. 女性の大学型高等教育進学を妨げる要因の考察	単	2007年05月	日本高等教育学会第10回大会、名古屋大学	北欧諸国など、欧米諸国の中には成人女性の高等教育進学者が多いこともあり、女性の進学率の方が高い国が存在する。しかし、日本の場合は依然として、女性の進学率の方が低い。その理由を整理し、それらの問題点について考察した。
13. グローバル化する高等教育におけるジェンダー問題：英国PMI以前と以降における大学院留学生の動向比較から	単	2006年12月	同志社大学教育文化学会第16回年次大会、同志社大学新町キャンパス	英国のブレア政権下では、大学院留学生を中心に留学生の受け入れを積極的に行うことにより、自国の政治・経済の進展させようとしているが、留学生の出身国による偏りは言うまでもなく、教育段階、ジェンダー等によっても著しい偏りが見られる。本報告では英国の留学生の動向について、特にジェンダーの観点から問題点を明らかにした。
14. 女性大学の理工学系分野進出の意義と問題	単	2006年09月	日本ジェンダー学会第10回大会、神戸大学六甲台キャンパス	女性大学人気の低迷により、定員割れする大学が相次いでいる中、数は少ないものの理工学系の学部・学科を開設することによって活路を見出している大学もある。それらの大学に共通する理念は何なのか、理工学系分野進出の意義と問題は何かについて明確化を試みた。
15. 英国大学院で学ぶ留学生の動向とジェンダー：PMI以前と以降の比較を通じて	単	2006年06月	大学教育学会第28回大会、東海大学湘南校舎	英国大学院で学ぶ留学生の動向について、英国の高等教育統計局(HESA)から独自に統計を入手し、ジェンダーの観点から考察を試みた。
16. 異文化間教育に関する横断的研究：共通のパラダイムを求めて	単	2006年06月	異文化間教育学会第27回大会(ケース/パネル・パネラー)、関西大学高槻キャンパス	異文化間教育のあり方を探るにあたって、ジェンダー教育との共通点と相違点について明確化を試みた。特に本質主義については疑問を呈し、多様性に着目することの重要性を指摘すると同時にそれだけでも問題があることについて言及した。
17. 国境を越える高等教育機関の動向と政府の国際化戦略：英国・香港の事例	共	2006年05月	日本高等教育学会第9回大会、学術総合センター	広島大学のCOE研究の共同研究者として、英国の高等教育機関の動向と政府の国際化戦略について、ジェンダーの観点から試みる事が要請された。有本章、横山恵子、大膳司、西尾亜希子。
18. 今日の大学の 대중化と大学教育：将来の市民の育成のために	単	2003年06月	大学教育学会第25回大会、大阪薬科大学、シンポジウム(シンポジスト)	博士論文執筆の際に調査対象としたロンドン大学院で学ぶ日本人留学生の動向や6年間にわたる自身の留学生活で見聞したことをもとに、日本の文化や伝統あるいは「当然」、「自然」、「当たり前」と捉えられている事象がそうとは限らないこと、そのような捉え方を批判的に捉えることによって既存の枠に捉えられない自由な発想の若者が育成される可能性があることを事例を挙げながら報告した。
19. 大学における女性学教育：教授法に関する現況と課題	共	2003年06月	大学教育学会第25回大会、大阪薬科大学	ラウンドテーブルで女性学がなぜ浸透しないのか、自省的に考える機会を持つということを目的に研究発表を行った。西尾亜希子、志水紀代子。
20. ロンドン大学大学院における日本人留学生の進路希望について：ジ	単	2002年06月	異文化間教育学会第23回大会、駿河台大学	博士論文の一部を発展させるかたちで報告した。本報告では、男子学生は留学前および留学中から脱サ

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
<b>2. 学会発表</b>				
エンダーの視点から				
21. Power Politics and the Cultural Creativity of Women in Japanese History: Transition from the pre-warrior to the post-warrior period	共	1999年06月	Women's Worlds 99: the 7th International Inter-disciplinary Congress on Women, University of Tromsø, Norway	ラ、起業、国際開発分野に従事等課程修了後の進路希望が明確で、日本での就職にこだわらない傾向が見られたが、女子学生の場合は男子学生と同じようなグループと語学留学ではない正規留学をすることが自らが留学の目的（「文化的旅行」と捉えることができる）になっており、進路希望が明確でないグループに2極化していた。
22. イギリス大学院に学ぶ日本人留学生が直面する問題・ジレンマの考察：ロンドン大学大学院生を対象とした事例研究	単	1999年05月	異文化間教育学会第20回大会、鳴門教育大学	「男は仕事、女は家庭」という性別役割分業観は、他の先進諸国と同様、日本でも比較的新しい考え方であることを歴史的に証明するために、様々な先行研究（画像を含む）をもとに報告した。富士谷あつ子、西尾亜希子。
23. Studying as a Foreign Student in London: A case study of Japanese male and female post graduate students at the University of London	単	1999年04月	Euroconference: Gender, Higher Education and Development, University of Oxford, UK	博士論文の一部について中間報告を行った。本報告では留学生はIELTSやTOEFLで高スコアを出していてもネイティブの学生と「対等に」ディスカッションしたり、論文を書いたりできないジレンマを最も強く感じていること、私的な問題（特に家族）が勉強に集中する上で強い影響を与えていることについて考察した。
24. イギリス青年男女のジェンダーによる役割分担に関する考察：ロンドンの青年男女を対象とした事例研究	単	1997年07月	女性学・ジェンダー研究フォーラム、国立婦人教育会館	博士論文の執筆にあたって実施したロンドン大学院で学ぶ日本人留学生（男女52名）を対象とした面接調査の一部について中間報告を行った。
				イギリスの若者の性別役割分業観を調べるために実施した男女計12名を対象に質問紙調査と面接調査をもとに、質問紙では「理想的な回答」あるいは自分を切り離れた「第三者的な回答」を、面接調査では「本音」と思われる回答をする傾向があることを明示した。
<b>3. 総説</b>				
1. Engaging with FACE: an international perspective	単	2017年2月27日	Forum for Access and Continuing Education, FACE Monthly e-Bulletin, Issue No. 110, February 2017	2016年6月にアイルランドで開催されたFACEの大会で'Global Approaches to Widening Access from across the UK'と題されたラウンドテーブルセッションのパネラーとして出席した際に西尾が報告した日本の高等教育事情や高学歴女性と労働市場の関係、およびパネラーらとの「高等教育における広がる参加」に関する議論についてまとめたもの。
2. なぜ女性社長には留学経験者が多いのか—女性社長の生き方に学ぶ	単	2012年05月	日本学生支援機構編ウェブマガジン『留学交流』vol.14.	留学経験のある女性社長は多くの女性と何が違うのかについて女性社長15名について調べ、女子学生が留学を含むキャリアデザインをする上での示唆を得た。論考（日本学生支援機構からの依頼原稿。）
3. Another Side of the Globalisation of Education: female postgraduate students studying at the University of London	単	2002年12月	大阪府立女性総合センター編『Dawn』(December 2002)	博士論文の概要を国内外の一般の読者向けにわかりやすく説明したもの。グローバル化する高等教育において、女性の学位留学は能力が高く、語学留学では物足りないと感じる女性の中で人気が高く、高度な文化的旅行のような感覚に基づいている傾向があることを明らかにした。論考（大阪府立女性総合センターからの依頼原稿。）4-5頁。
<b>4. 芸術（建築模型等含む）・スポーツ分野の業績</b>				
<b>5. 報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等</b>				
1. 『なぜジェンダー教育を大学で行うのか—日本と海外の比較から考える』（村田晶子・弓削尚子編著、青弓社、2017年）	単	2018年09月 刊行予定	「日本ジェンダー研究」第21号、日本ジェンダー学会	北米、フランス、中国、日本の第一線で活躍する研究者らが大学におけるジェンダー教育の歴史的経緯と現況や、男性学・男性性研究の教育的意義について執筆している同著を著評した。男女共同参画社会の実現、女性活躍が期待されるわが国において、大学でジェンダー教育を行うことの意義はきわめて大きい。
2. 『日本のジェンダーを考える』（川口章著、有斐閣選書、2013年）	単	2014年08月	『日本ジェンダー研究』第17号、日本ジェンダー学会	川口章同志社大学教授による同著を著評した。本著は学校教育、就職、結婚、出産、子育てなど様々なライフイベントに、ジェンダーがいかに深く関わっているかを論じているが、労働経済学を専門とする研究者らしく、それらのライフイベントを「キャリア」の視点から考察している点が新しいことを指摘した。93-95頁。
3. 『異文化を知るこころ：国際化と多文化理解の視座から』（奥川義尚、堀川徹、田所清克編、世界思想社、2003年）	単	2004年06月	『異文化間教育』20号、異文化間教育学会	奥川義尚京都外国語大学教授らによる同著を留学経験や、日本人留学生が留学中に直面する問題について学業面だけでなく、私生活面にも焦点をあてて考察した経験を活かしながら著評を行った。94-98頁。
4. 『ジェンダー学を学ぶ人のために』（富士谷あつ子、伊藤公雄監修）	単	2000年04月	世界思想社	D. レナード著「イギリスにおける女性学の流れ」、36-58頁の翻訳を担当。イギリス女性学の第一人者であり、西尾の修士論文・博士論文の指導者であった



研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
<b>5. 報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等</b>				
5. Familiar Exploitation: A New Analysis of Marriage in Contemporary Western Societies (by Christine Delphy & Diana Leonard, Cambridge: Polity Press, 1992, 301pages)	単	1996年03月	『武庫川女性学研究』（創刊号）武庫川女子大学女性学研究会	レナードロンドン大学教育研究所教授による女性学の広がりに関する論文を翻訳した。36-58頁。 修士課程、博士課程を通じ論文指導教官であったダイアナ・レナード教授の著書53-54頁。
<b>6. 研究費の取得状況</b>				
1. 科学研究費補助金 基盤研究 (C) 新規	共	2017年07月～現在	文部科学省および日本学術振興会	研究代表者。課題番号17K04900 テーマは「女子大学生のための『お金』の視点を取り入れたキャリア教育カリキュラムの開発」、共同研究者は高屋定美関西大学商学部教授。
2. 科学研究費補助金学内奨励金	単	2015年07月～2016年03月	武庫川女子大学	テーマは「女性のためのパーソナル・ファイナンス教育モデルの構築」である。
3. 科学研究費助成金 基盤研究 (C) 継続	単	2014年04月～2015年03月	文部科学省および日本学術振興会	研究代表者。課題番号24531084。テーマは「女性の貧困予防策としての教育のあり方に関する実証的研究」である。
4. 科学研究費助成金 基盤研究 (C) 継続	単	2013年04月～2014年03月	文部科学省および日本学術振興会	研究代表者。課題番号24531084。テーマは「女性の貧困予防策としての教育のあり方に関する実証的研究」である。（研究協力者は松並知子武庫川女子大学非常勤講師。）
5. 科学研究費助成金 基盤研究 (C) 新規	単	2012年04月～2013年03月	文部科学省および日本学術振興会	研究代表者。課題番号24531084。テーマは「女性の貧困予防策としての教育のあり方に関する実証的研究」である。（研究協力者は松並知子武庫川女子大学非常勤講師。）
6. 科学研究費補助金学内奨励金	単	2010年10月	武庫川女子大学	テーマは「アメリカの女子大学におけるリーダーシップ教育に関する実証研究—スミス・カレッジを中心に」である。
7. 公募委託調査研究費	共	2009年12月～2010年09月	(財) 全国勤労者福祉・共済振興協会 (財団法人全労済協会)	共同研究。共同研究者は高屋定美関西大学商学部教授。テーマは「社会的排除と高等教育政策に関する国際比較—高等教育の経済効果の視点から」である。
8. 科学研究費助成金 基盤研究 (B)	共	2004年04月～2007年03月	文部科学省および日本学術振興会	研究協力者。研究代表者は、小島勝龍谷大学文学部教授で、テーマは「異文化間教育に関する横断的研究—共通のパラダイムを求めて」である。佐藤群衛、塚本恵美子、村田雅之、山本雅代、鈴木一代、馬淵仁、渋谷真樹他。

学会及び社会における活動等

年月日	事項
1. 2016年3月1日～現在	Forum for Access and Continuing Education (英国)
2. 2003年06月～現在	日本教育社会学会
3. 2002年05月～現在	日本高等教育学会
4. 2001年09月～現在	大学教育学会
5. 1998年09月～現在	日本ジェンダー学会
6. 1992年06月～現在	日本女性学研究会
7. 1992年06月～現在	日本女性学会